

平成二十八年年度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 問題用紙は1～17ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を開いたまま裏返しておきなさい。

受験番号

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

□ 次 of 文章を讀んで、後の問いに答へなさい。

チョウがひらひら美しく飛んでいる。なんの気なしに見ていけば、それだけのことである。しかし、もう少しよく見ていると、そのチョウがどこでも飛んでいるわけではないということがわかつてくる。

I、ナミアゲハ（黄色と黒の縞の^{しま}①モヨウをもったアゲハチョウ）が飛んでいるのをよく見てみると、その飛ぶ道は決まっているのである。道の右側は飛ぶが左側は飛ばない。それはなぜか、僕にはわからなかった。なぜ右側は飛んで、左側は飛ばないのか。こういうくだらないことを^②イツシヨウケンメイ考えたり、調べたりした。

そうして、結果的にわかつたことは、非常に^③タンジュンであつた。

ナミアゲハは日がよく当たっている木のこずえに沿つて飛ぶのである。だから、例えば、右側に木があつたりすると、アゲハチョウはそこを飛んで、木が生えていない左側は飛ばない。あるいは、木は両側に茂っているのだが、たまたま太陽のぐあい左側の木のほうには日が当たつておらず、右側の木のこずえだけに日が当たつていたりすると、アゲハチョウは右側の木のこずえだけに沿つて飛ぶ。左側の日陰になつている所は絶対に飛ばない。それを見ていると、チョウはいつも決まつた道を飛ぶことになる。それだけの話だということがわかつた。

アゲハチョウが見ている世界では、日の当たつてゐる木のこずえは非常に重要なものとして浮かびあがつていて、チョウにとつてはそれしか見えず、チョウはそこを飛んでいくことになる。

II、同じように木の生えている所でも、モンシロチョウはまた別の所を飛んでいる。モンシロチョウは木のこずえに沿つて飛ぶことは絶対にない。たまたま風に吹き上げられたとしても、彼らは急いで下りて、下の草原に行つてしまふ。そして、その草原の上はどこでも飛ぶ。別に決まつた道があるとはどうしても思へない。¹どちらもチョウでありながら、こんなに違ふ。それはなぜかということいろいろ考へてみた。

アゲハチョウの仲間、特にナミアゲハは、ミカン、カラタチ、ユズなどの木の葉っぱに卵を産み、幼虫はその葉っぱを食べて育つ。そして、その木の上でサナギになり、羽化する。

オスはなるべく新しいメスを探して、自分の子を産んでもらいたい。Ⅲ 必死になってメスを探す。そのためオスは飛んで回るのである。

新しいメスがいる可能性のある所とはどこか。ミカン、カラタチ、ユズなどの木がある所である。イネ科の草が生えている草原とか、キャベツがある畑とかに、新しいメスが出てくる可能性はほとんどない。だから、オスは木のこずえに沿って飛んでいなければ、メスを見つucker可能性はないのである。

しかも、ミカンとか、ユズとかいう木はいわゆる陽樹である。陽樹とは、日の当たる場所に生える木である。こんもり茂った林の中に生える陰樹ではない。いまこずえに日が当たっていないというのは、もしかしたらそこは、一日中日が当たらない場所である可能性もある。もしそうだったら、そこにミカン科の陽樹が生えていることはない。そんな所を飛んでもムダである。しかし、いま日が当たっている所は、一日のうちで必ず日が当たる所だから、そこに陽樹が生えている可能性は非常に高い。彼らが構築している世界はそのような木のある所である。彼らはその世界の中を飛ぶのである。

同じことはナミアゲハのメスについてもいえる。

ナミアゲハのメスは、卵を産む。卵を産むべき場所は、ミカン、カラタチ、ユズというミカン科の陽樹の葉っぱである。そうすると、メスも同じように、日の当たる木に沿って飛んで行って、たまたま生えていたミカン科の木の匂いにおを鼻で感じると、それにとまり、肢先あしでそれを確かめて卵を産むのである。だから、彼らにとって意味のある木はそのようなミカン科の木である。草は全く関係ない。彼らにとっては草はあってもなくても関係がない存在なのである。

ところが、モンシロチョウの幼虫は、普通、キャベツで育つが、本来はナズナ（ペンペン草）やイヌガラシなどのような野生のアブラナ科の草の葉っぱを食べる。したがって、卵を産むときもそういう所に産むし、新しいメスが出てくるのもそういう場所で

ある。草の全くない道の真ん中とか、グラウンドの真ん中といった所でモンシロチョウが生まれてくることもないし、卵を産む草が生えていることはない。木の上にもそのような草は生えていない。そのためモンシロチョウは草の生えた所を探し回ることになる。風に吹き上げられて木の上にあがってしまったときにも、早く草のある所に戻らなければと下りてくる。

草原は、広く広がっているから、太陽は真上から照っている。今いったようなアブラナ科の植物はみんな日向ひなたに生える。日が当たっている所だったらどこでもいい。草原には日向は一面にある。すると、モンシロチョウには決まった道はなく、日向の草地の上をあちこちふらふらと飛んでいる。絶対に木の上にはあがらない。日が翳かげった所にはいかない。そうすると、モンシロチョウの飛ぶ所は決まってくるわけで、彼らにとって大事な世界というのは、そのような日の当たった草原であるということになる。

草原に木が点々と生えているときに、我々は全体を見ることができないから、そこ全体が環境、つまり木の点々と生えた草原全体を環境と見る。しかし、チョウにとっては、^a草原全体がその世界ではない。アゲハチョウにとっては、草原自体はその世界の中に存在しておらず、その草原に生えた、^b日の当たっている木だけが世界である。モンシロチョウにとっては木は存在していないに等しく、大事なものは日の当たっている草原である。同じひとつの場所を見たときに、人間とモンシロチョウとアゲハチョウとでは、世界は全く違っている。ひとつの「環境」という言葉でくくってしまったてはならないし、人間がそれを、^c客観的環境と呼ぶことは彼らにとっては意味がない。

³「環世界」という言葉は昔は「環境世界」と訳されていた。しかし、これでは、客観的な意味での「環境」というのを否定したドイツの動物学者、ユクスキユルの考えに反してしまふ。ここで問題なのは、客観的な意味での「環境」ではなく、主体の動物が積極的に構築している世界のことである。だから、ぼくは環世界という言葉を^⑤テイシヨウしている。

大切なのはこの環世界であって、^d一般的な環境が問題なのではない。

我々人間が^e「良い環境」と言うとき、それは私たちにとって清潔で安全な所を指している。例えば、緑ひとつとっても、「雑草」が生い茂ってはいはだめだし、立派で美しい木であっても毛虫がつかない方がよい。そして、秋になったら落ち葉に手のかか

らないことが望まれるという具合である。夏にはホテルが飛んでくれたら最高だが、カやハチはいてほしくない。そのような環境である。しかも、条件はそれだけではない。学校や図書館、大きなスーパーも身近にほしいし、バスや電車などもすぐ利用できることが好ましい。教育や買い物、交通など生活をする上で適度に便利であることが必要だ。このような「環境」とは、一般的な自然環境の問題ではなく、勤め人や通学生のいる一般家庭にとっての環世界の問題である。昔よく言われた「4 孟母三遷の教え」なども、この範疇5のことである。

人々が価値を与えるのは、5 そのように限定されたものに対してである。

そうなるとこのような人間にとってよい環境は、チョウとかトンボとかテントウムシ、小鳥などにとっては、決してよい環境ではない。このような動物たちにとってこの場所は、自分たちの環世界を構築しえない環境であろう。我々が何気なく「環境」という言葉を口にするとき、そこには常に 6 このような環世界の問題が関わっているということにも配慮すべきであろう。

(日高 敏隆 としたか 『生命とは何だろうか?』より)

問一 〓 線部①～⑤のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二

I

III

 に当てはまる言葉として、最も適当な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記

号は一度しか使えません。

- ア あるいは イ 例えば ウ だから エ ところが

問三 ——— 線部1 「どちらもチョウでありながら、こんなに違う。それはなぜか」とありますが、それを説明した次の文章の空

欄【A】〜【C】に当てはまる言葉を、それぞれ指定された字数で本文中から抜き出して答えなさい。

ナミアゲハは、【A・七字】の葉っぱに卵を産む。【A】は、いま日が当たっている所にある可能性が高い。そこで、日がよく当たっている木のこずえに沿って飛ぶことになり、結果的に【B・八字】を飛ぶように見える。それに対して、モンシロチョウは、アブラナ科の草の葉っぱに卵を産む。それらの植物は日の当たる草原に生える。そして、そこには日向ひなたが一面にある。そこで、日向の草地の上を【C・八字】と飛ぶことになる。

問四 ——— 線部2 「産んでもらいたい」を単語に分けたとき、どのような組み合わせになりますか。次の中から正しいものを選び、記号で答えなさい。

ア 動詞／形容詞

イ 動詞／動詞／助動詞

ウ 動詞／助詞／形容詞／形容詞

エ 動詞／助詞／動詞／助動詞

オ 動詞／助動詞／動詞／形容詞

問五 ——— 線部3 「環世界」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「環世界」を端的に説明している部分を、本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

(2) 線部 a ~ e のうち、本文中での意味が「環世界」に含まれるものをすべて選び、記号で答えなさい。

問六 ——— 線部4 「孟母三遷の教え」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもは、どんな環境でも長く住んでいれば、住みよい土地だと思おうようになるという教え。

イ その子どもに強い意志さえあれば、どのような環境にあっても立派に成長するという教え。

ウ 本当に子どもがかわいいなら、厳しい環境の中に置かなければならないという教え。

エ 子どもの人間形成には、家柄や環境よりも教育のほうが大切であるという教え。

オ 子どもの教育のためには、よい環境を選ばなければならないという教え。

問七 ——— 線部5 「そのように限定されたもの」とありますが、それはどのような環境ですか。本文中の言葉を使って、四十五字以内で書きなさい。

問八 ——— 線部6 「このような環世界の問題」とありますが、どのような問題があるのですか。最も適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

- ア すべての動物は環世界なしには生きられないという問題。
- イ 人間にとっての環世界をさらに拡大しても良いのかという問題。
- ウ 人間が安易に環境という言葉を使うべきではないという問題。
- エ すべての動物が望む環世界というものは存在しないという問題。
- オ 人間はすべての動物と共存する環世界をつくるべきだという問題。

□ 次の文章は、戦後まもなくの東京を舞台にした小説「夏草の匂い」の一節である。小学校五年生の少年康之は、戦争で父を亡くし自宅も焼失してしまったため、母とともに伯母の家に身を寄せている。伯母は母の姉なのだが、仲が悪く、昨晚二人が口論しているのを康之は聞いている。これを読んで、後の問いに答えなさい。

焼け残った木造校舎は、窓硝子が割れていたり、羽目板が剥ぎ奪られたりして、見るも無惨なすがただった。その日は朝礼があつたので、ひとまずカバンを教室に置いて来なければならぬ。康之は校庭を斜めに横切ると、下駄箱の並んでいる薄暗い入り口を入っていった。埃っぽい匂いが鼻を衝いた。そのとき、彼はふと、母が燃えさかる焔の色を眺めながら、とつぜん何だか死んでもいいという気になったと話してくれたことを思い出した。その感覚は、もしかしたら自分が焼け跡の雑草の繁みの中で、はげしい草いきれに酔い、そのまま身を投げ出してしまいたいと思つたあの感覚とおなじ性質のものなのだろうか。全身をひたす

A、しだいに抜け殻のようになっていく自分……。康之は唇を噛んだ。お母さんはそのとき死んでいればよかったんだ。死んでいれば、なにも伯母さんと醜くいがみ合いながら、幼い息子との明日を思い煩うこともない。彼は自分が母のお荷物であることを強く意識した。そして、すまないと思う気持ちと、
B、べつにぼくだって生きてたくて生きているのではないと思ふ気持ちとで、胸の中が熱くたぎってくるのをおぼえた。彼はその日、学校にいる間じゅう、そのことを考えつづけていた。四時限目の授業の終わりを告げるベルが鳴り、解放された喜びに胸を弾ませながら校門を出たとき、思いがけず母に呼びとめられた。彼女は涼しげな夏の着物に余所行きのモンペをはき、黄色くなりかけたパラソルをさして立っていた。何がはいつているのか、片手に手さげ袋を持っている。「いったいどうしたの？」彼が、
1 不審な面持ちで訊ねると、母はふつと目で笑つて「訳はあつた話すわ」といいながら、先に立つて歩き出した。

母が口をひらいたのは、電車の音が間近に聞こえる坂路にかかったときだった。彼女は歩調をゆるめると、ハンカチを額や鼻のあたりに軽く押しあてながら、「お母さんね、今朝あれから、また伯母さんとやり合っちゃったの」といった。「ぼくのことです？」

康之はそう訊き返したが、それは誘導尋問にすぎなかった。今朝、便所で立ち聞きしたことから、諍いの種子は自分ではないことを、彼は確信していた。「ううん、今度はお母さんのこと」彼はすかさず訊いた。「いったいどういうことさ」母は笑うと「まだあんたにいったって、わからないわ。これは大人どうしの話だもの」お母さんはまだぼくを子供だと思っている。彼は憤慨したが、黙っていた。すると母が指でほつれ毛を掻き上げて、ことさら快活な口調でいった。「それよりね、お母さんいいこと思いついたの。お父さんのご命日にはまだちよつと間があるけど、これからお墓参りかたがた二人でピクニックに行かない？ ううん、お墓参りなんかどうでもいいの。とにかくあそこの涼しい木陰で、お弁当をつかきましょうよ。お母さんね。じつは腹が立ったので、あの家を飛び出してきたの。きょうは遅くまで帰らないつもり。それでお前を迎えにきたのよ。お弁当をつかったら、新宿へでも行って遊ぼうね」

父の命日は九月の末だから、たしかにそれまでには間があつた。いつたい何でこんな日に墓参りを思いついたのだろう。ピクニックだとするなら、墓地を選ぶなんて余計どうかしている。康之は母の精神状態が心配になつた。が、すくなくとも外見からは、どこと違って変わったところは見受けられない。彼は訊ねた、「でもどうしてあんな所でお弁当をつかおうなんて思いついたのさ」「だから、いまいったでしょ。あそこは涼しい木陰があるし、それに静かだからよ。見てごらんさい、こんな炎天の焼け跡でお弁当がたべられますか」なるほど、二人が歩いて行く路の左手には枠だけになつた白い塀がつづき、ぼつかりあいた穴のむこうに、夏草が猛々しく生い繁っているのが眺められた。何かの工場の跡らしかった。涼しい木陰をつくる樹など、どこにも見当たらなかつた。彼は、母が自分の気持ちを鎮めるためにそこへ行くことを望んでいる、と考えるしかなかつた。やがて二人は線路をまたぐ陸橋に出た。菩提寺はその陸橋をわたつて、南へ十五分ほど歩く位置にあつた。「暑くない？」母はパラソルを差しかけたが、その影は二人を覆うには小さすぎた。かれらは言葉すくなに足をはこんだ。そして間もなく菩提寺の山門にたどり着いた。山門といつても、康之の記憶に残る仁王門はなかつた。本堂も鐘楼も跡形なく消えていた。本堂の礎石さえ丈高い雑草に埋もれて見えなかつた。母が掘つ立て小屋のような寺務所で線香を買いもとめている間に、彼は忠霊塔の脇にある井戸小屋

で桶おけに水をみたした。それから二人で墓地へ通じるなだらかな石段を降りて行った。石段は葉の繁った樹の枝で覆われていた。降りながら目を西の方角に向けると、秩父ちちぶの山塊がcaすむように眺められた。

広い墓地に人気がなく、ひと筋の香煙も認められなかった。康之の父の墓は石段を降りきつたところにある。簡単に墓参りをすませると、二人は石段の脇の木陰に陣取って、⁵意味もなくほほえみ交わした。母が持参したのは薩摩芋入りの握り飯だった。塩の用意もあった。ピクニックのご馳走ちちはそれだけだと思っていたところへ、母がいたずらっぽく笑いながら、「きょうはとっておきのものを持ってきたのよ、どう、これ」といって缶詰のコンビーフを出したので、康之は歓声をあげた。それはいつであつたか、軍人遺家族に特配になった分の残りだった。が、彼は突然不安になった。なぜ母はあれほど大事にしまつて置いたコンビーフを惜しげもなく振る舞う気になったのだろう。そういえば彼女が余所行きの身なりをし、汗で落ちてしまつたが、顔に薄く白粉おしろいをはたいていたのも気にかつた。お母さんはいままた、「何だか死んでもいい」という気になつてゐるのだろうか。

食事が終わり、母が水筒に入れてきたお茶で喉をうるおすと、彼は母の顔を窺うかがつた。これからどうするつもりなのだろうという彼の心の裡うちを読み取つたかのように、母は不意に若々しい動作で立ち上がると、「さあ、康之。何かして遊ばない？ あの家にいるとお前と遊ぶにも気兼ねしなきゃならないんだもの。きょうは思いつきり愉たのしく遊びましようよ。何をやる？ といっても、お母さんはあまり知らないからねえ」といってわざと洗面をつくつた。彼は⁶胸をしめつける不安に抗あらがいながら、それでも精いつばい無邪気を装つて、思いついた遊戯を持ち出してみた。それは二人でジャンケンをして、「紙」で勝つたらパイナップルと字数を合わせて六歩、「石」で勝つたらグリコと三歩、というように先に進み、どちらが早く目標点に到達するかを競う簡単な遊戯だった。母はにっこり笑うと、「ああ、あれなら知ってるわ」といった。「それじゃ、この石段でやろう。どっちが先にてっぺんまで行きつくか」

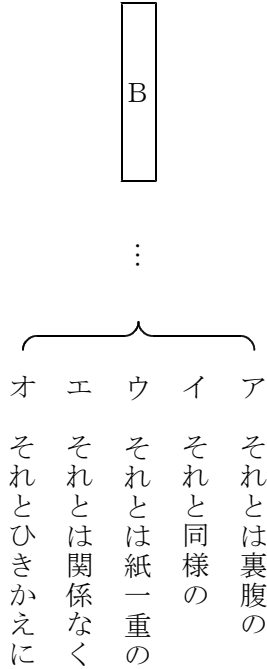
やがて遊戯がはじまつた。だが、どうしたことだろう、康之がつづけざまに四度も勝ち、そのために母とはだいぶ離れた位置に立つことになつた。母はほほえみながら、石段の一番下に佇たたずんでいる。彼は墓地から離れて行こうとするのに、母は相変わら

7
 ず墓地の中、父の墓の前に佇んでいる。康之は母に勝つてもらおうと必死になった。だが、彼にはジャンケンポンと声を出して手を振る動作が、何か母との別れの身ぶりのように思われてならなかった。そこで彼は不吉な思いを払いのけるように、大げさな身ぶりで、いっそう声を張りあげた。しかしその声は墓石の群れに撥ね返り、まだ夏のものである湧き立つ九月の空に、むなしく消えていくだけだった。

(高橋 正男^{まとお} 『夏草の匂い』より)

問一 A・B に当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- A : ア 孤独感 イ 悲壮感 ウ 疎外感 エ 無力感 オ 劣等感



問二 ─── 線部1「不審な面持ち」とありますが、康之はなぜこのような表情になったのですか。本文中の言葉を使って、

二十五字以内で答えなさい。

問三 ——— 線部2 「誘導尋問」とありますが、その内容を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母と伯母との言い争いは自分のせいではないのだということを再確認し、言い争いの原因を母の口から話させるようにさそい出すためのもの。

イ 母が伯母と言い争った原因はさておき、とにかく自分は母のお荷物ではないということを肯定するのに十分な材料を得ようとするもの。

ウ 母と伯母が自分のことがきっかけで言い争ったという事実を否定したいばかりに、事実とは反対の答えを導きだそうとするもの。

エ いい年をした大人である母と伯母が、一体どういう理由で言い争いをしたのかということに興味を持ち、そのことについてしつこく尋ねるといふもの。

オ 母が息子である自分を気にかげず、伯母との関係にこだわってばかりなので、母の注意を自分に向けさせようとして、あえて尋ねたもの。

問四 ——— 線部3 「ことさら快活な口調」とありますが、母はなぜ「ことさら快活な口調」を用いたと考えられますか。その理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 康之が自分をお荷物だと思っっているようなので、それを否定するため。
- イ 父を失ったことが原因で、暗く無口になってしまった康之を励ますため。
- ウ 自分のすばらしい思いつきに満足し、康之に話したくてたまらなかったため。
- エ 伯母の家を出て行くという自分の計画を康之に悟られないようにするため。
- オ 好ましくない話から話題を変えて、沈滞してしまった二人の気分を変えるため。

問五 —— 線部4「いったい何でこんな日に墓参りを思いついたのだろう」とありますが、母が墓参りに行く目的を、康之は初めどのように推測しましたか。本文中から十字程度で抜き出して答えなさい。

問六 —— 線部5「意味もなくほほえみ交わした」とありますが、この時の康之の心情を説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 暑さから逃れ、やっと涼しい木陰にたどりつき、ほっとしている。
- イ 目的であった父の墓参りを無事すませることができ、満足している。
- ウ この場の二人の雰囲気壊すまいと、表面を取り繕おうとしている。
- エ お弁当を食べることができうれしさを隠しきれないでいる。
- オ わざと子どもっぽくふるまう母に、いやいや調子を合わせている。

問七 ——— 線部6 「胸をしめつける不安」とありますが、その内容を表した一文を本文中から探し、最初の十字を抜き出して答えなさい。

問八 ——— 線部7 「康之は母に勝ってもらおうと必死になった」とありますが、康之が必死になった理由を五十字以内で説明しなさい。

〔三〕 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

むかし青砥左衛門、夜にaなりて①出仕をぞしける。いつも※燧袋ひうちぶくろに入れて持ちたる錢を、十文取りはづし、誤りて滑川なまりがわに落とし入れぬx。少事の物なれば、②よしさてもあれかしとて行き過ぐべかりしかども、以ての外にあわてて、その辺りの人家へ下人を走らせ、錢五十文を出してたいまつ続松を十把買ひて、これを燃やしつつ、川を浚さらへてアつひに十文の錢を求め得たりけり。後に人これを聞きて、「十文の錢を③求めんとて、五十文にてつ続松を買ふ。これ小き利を得るために大きな損を行ふにあらぬや」と④笑ひければ、青砥左衛門眉をひそめて、「さればこそ※御辺ごへんどもは愚かにて世の理ことわりを知らず、民を恵む心のなき人bなりけれ。十文の錢は、その時求めずは、水底に沈みて永く失ふべし。続松を買ひつる五十文の錢は、商人に渡りて長く失せず。我がⅠは商人のⅡなり。我と彼と何の差別やある。かれこれ六十文の錢をⅢ。天下の利なり」と※爪弾つまはじきをして申しければ、【難じて笑ひつるかたはらの人ども、常人の思案にて言はば、せぬをよしと思ふものcなれど、天下におきての損得さへ考へてかくするイやうなりとて、舌を打ちてぞ感じける。】

いはば、軽き事なれども、めでたき見識なくては叶かなはぬZ事ぞかし。

(『太平記』より)

注 ※ 燧袋 … 火打ち石と火打ち金など火をつける道具を入れる袋。

※ 御辺 … 二人称でやや目上の人に用いる。「あなた」「そなた」の意。

※ 爪弾き … 人差し指または中指の爪先を親指の腹にかけてはじくこと。氣にくわない時や、忌み嫌う時に行う。

問一 〰️線部ア・イを現代仮名遣いに直しなさい。

問二 次の各問いに答えなさい。

- (2) (1) 〰️線部 a・b・c の中で、働き・意味の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。
〰️線部 x・y・z の中で、働き・意味の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 〰️線部①には文意を強める働きを持つ法則が用いられていますが、その法則を何と言いますか。

問四 〰️線部②「よしきてもあれかし」を解釈したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おやまあ、大変なことだよ。
イ まあ、仕方のないことだよ。
ウ よろしい、探してこようよ。
エ おい、今すぐ取ってこいよ。
オ ああ、手が滑ったことだよ。

問五 ー 線部③ 「求めんとて」を現代語訳しなさい。

問六 ー 線部④ 「笑ひ」とありますが、なぜ笑ったのですか。その理由を簡潔に説明しなさい。

問七 **I・II**には、対になる言葉が入ります。それぞれに当てはまる漢字一字を、本文中から抜き出して答えなさい。

問八 **III**に当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 燃やしたり イ 買ひたり ウ 探したり エ 得たり オ 失ひたり

問九 【難じて笑ひつる ー 感じける。】とありますが、「かたはらの人ども」が感心した内容をまとめた次の文の（ X ）・

（ Y ）に当てはまる言葉を考えて答えなさい。

青砥左衛門がとった行動は、普通の人ならば（ X ）と考えるものだが、実は（ Y ）のことまで考えたものであったから。

Answer number input box

問一 ① ② ③ ④ ⑤

問二 I II III

問三 A B

問四 C

問四

問五 (1)

問五 (2)

問六

問七 3x10 grid

問八

問一 A B

問二 3x10 grid

問三 問四 問五

問六 問七

問八 3x10 grid

問一 ア イ 問二 (1) (2)

問三 問四 問五

問六

問七 I II 問八

問九 X Y

一 (計44点)

問一 ① 模様 ② 一生懸命 ③ 単純 ④ 無駄 ⑤ 提唱

2点×5

問二 I イ II エ III ウ

2点×3

問三 A ミカン科の陽樹 B いつも決まった道

C あちこちふらふら

2点×3

問四 エ

3点

問五 (1) 主体の動物が積極的に構築している世界

3点

(2) b e

4点

問六 オ

2点

問七 清潔で安全な所、しかかも生活する上で適度に便利である、環境。

6点

問八 エ

4点

二 (計30点)

問一 A エ B ア

2点×2

問二 母が余所行き。のモンペをはいて、突然学校に

4点

10

3点

問三 ア オ 自分の中の気持ちを持ち、を鎮めるために

4点 問四

3点 問五

問六 ウ お母さんは、また、

3点

問八 母が自分の残し、てうと、生、して、いるよ、うに思

6点

三 (計26点)

1点×2

問一 ア ついに イ ようなり 問二 (1) a (2) x

2点

2点

2点

問三 係り結び (の法則) 問四 イ 問五 探そうとして

2点

2点

2点

問六 (青砥左衛門が) 十文のお金を探すために五十文も使ったから。

4点

問七 I 損 II 利(得) 問八 エ

2点

2点

2点

問九 X しない方がよい Y 天下の損得 (天下の利益)

2点×2